国際研究論叢　20（2）：71～85，2007

家庭科教育における被服教育のあり方
―家庭および学校教育における被服関連行動の状況把握―

西　岡　敦　子[*1]　　村　田　浩　子[*2]

Optimizing Clothing Education in Home Economics

Atsuko Nishioka[*1]　　Hiroko Murata[*2]

Abstract

Clothing-related activities in the home and practices in school education are examined in order to clarify the role of clothing education in home economics and determine its ideal form. The possession rates, purpose and frequency of use of sewing boxes, sewing machines and irons in homes were surveyed along with the making of clothes. Additionally noted were the decrease in opportunity for students to practice sewing and handicrafts, the variety of practice, and nature of items produced in school sewing courses. A relationship between awareness of production and personality was also shown. It is intended to use these findings to optimize clothing education in home economics courses, in particular by taking a broader perspective.

キーワード

家庭科教育　被服教育　被服関連行動　被服実習

Ⅰ．緒言

ここ数年、短期大学で衣服構成学実習を担当している。家庭科の教職免許取得の必修科目であることからも、基礎固めも含め様々な課題を課している。しかしながら、あまりにも高校までの衣服関連の実習が減り、なおかつ簡素化される中で、短大での実習のみでこれまで積み残されてきた課題を修得させることが困難な状況を呈してきていると感じている。

今、中学校の家庭科では衣服実習は選択領域になっているので、このような状況も致し方ないのかもしれない。また、教える側である教員の専門性も関連していると思われる。

＊１にしおか　あつこ：大阪国際大学人間科学部助教授〈2006.９.27受理〉
＊２むらた　ひろこ：畿央大学短期大学部助教授

家政科の五本柱として、食物・被服・住居・育児・家庭経営が挙げられているが、全国的な家政学部の減少とともに、中でも被服関連学科は衰退し、健康ブームとともに食物関連学科は繁栄しているように思われる。家庭科教員が養成される場の変化が、教員の得手不得手となり、それがそのまま現場での年次計画に影響を与えているのも否めないと思われる。また、家庭においても縫製するという作業自体を見たり、経験することが無くなってきたことも大きいと思われる。

ではなぜ、そこまで被服領域が衰退してきたのかを考える必要がある。被服が既に家庭の外のものとなってきていることが挙げられるだろう。海外から安価な製品が大量に輸入され、家庭での縫製を必要のないものとしてきた。もはや家庭に残されている被服領域は、せいぜい洗濯と保管、すなわち衣服管理の領域のみのように思える。その領域でさえも、近年においては100円均一や300円均一ショップでも衣料品が売られ、安価なことから数回着用したら終わり、であるとか、ボタンが取れても修繕をせずにそのまま廃棄するという学生の声も聞くほどになってきており、必要性が低下してきているようである。環境保全の観点からは大いに問題であるがこれが現実であろう。それでも、人間の成長や運動、生理に合わせて適切な被服を選択するという領域は生き残っていくであろうし、そのための被服構成領域の知識や技術は必要であろう。また、家庭生活を心の豊かさや潤い、クオリティという面から見れば手芸領域もまだまだ失われてはいけない領域のように思われる。

そこで、おもに被服構成実習、手芸という立場から、今後の被服教育のあり方について考えるべく調査を行っていきたいと考えている。また、家庭科男女共修の影響等についても考えることができればと思う。

まず今回は、家庭における被服関連行動、および、学校教育における被服関連実習の内容等を調査し、その状況を明らかにしたいと思う。

Ⅱ．方法

Ⅱ－１　被調査者

被調査者は、近畿圏の２大学、２短期大学に在籍する学生、女性294人、男性84人、計378人であった。詳細は表１のとおりである。

表１　被調査者

人

	女性	男性	計
18歳	42	18	60
19歳	136	33	169
20歳	101	14	115
21歳	11	9	20
22歳	3	7	10
23歳	1	2	3
無回答	0	1	1
計	294	84	378

Ⅱ－２　調査方法

調査方法は、質問紙による無記名回答方式にて集団調査法を用いた。なお、回答の可否は被調査者自身で選択可能である。

実施時期は、2005年９～10月であった。

Ⅱ－３　調査項目

調査項目は大きく分けて次の４つから成る。

１項目目は、家庭における（本人を除く）被服行動に関する環境を問う設問である。

小項目は、家庭に裁縫箱が常備されているか、どんなときに使用されているのか、家庭にミシンやアイロンはあるのか、使用頻度はどの程度か、家庭で洋裁、和裁や手芸等をする人はいるのか、どのような手芸をするのか、である。

２項目目は、被調査者自身の被服に関する環境や行動を問う設問である。

小項目は、被調査者自身の裁縫箱や裁縫セット（携帯用）の有無、どんなときに使用されているのか、ミシンの使用頻度や使用用途、アイロンの使用頻度、洋裁、和裁や手芸等をするのか、どのような手芸をするのか、である。

３項目目は、被調査者が家庭科等（学校教育）で制作した作品を問う設問である。

小項目は、小学校、中学校、高等学校における、縫い物と手芸等の実習経験の有無、制作品名、である。

４項目目は、被調査者のもの作りの好き嫌いとそれに関係すると思われる意識を問う設問である。「ものを作るのが好き」、「手先が器用」を含む18項目に対して「大変そう思う」から「大変そう思わない」までの５件法で問う。

他に、フェイス項目を含め、計60問であった。

Ⅲ．結果および考察

Ⅲ－１　家庭における（本人を除く）被服行動に関する環境

本人を除く家族の被服環境に関する行動を、裁縫箱、ミシン、アイロンの有無や使用状況から見た結果は、表２のとおりである。

裁縫箱、アイロンは、ほぼ100％の家庭が所持しており、ミシンは80％ほどが所持していた。

裁縫箱の使用目的は、ほとんどが「ボタン付け」（採択率95.1％）であり、次点は半減し「スカートやズボンの裾まつり」（採択率44.2％）となり、３位以下はさらに半減し「小物作り」（採択率20.3％）「手芸」（採択率17.1％）と続く。また、「靴下の繕い」は16.0％と低く、「かぎ裂きなどの修繕」、「鞄などの修繕」項目も5％前後の採択率で、繕わずに廃棄という消費状況が読みとれそうである。ただ、「スカートやズボンの裾まつり」について言えば、裁縫箱を利用せずに再生させる方法が一般化してきているとも考えられる。熱接着テープを裾上げ部に乗せてアイロンで接着するという、針糸を不要とするものである。同様に「かぎ裂きなどの修繕」においても熱接着シートが販売されており、素人が下手に修繕するよりも見栄えは良いようである。ただ、今回の調査では縫製に関わる新

表２　家庭における被服行動に関する環境（その１）

人（%）

n=378	無	有		
裁縫箱	9（ 2.4）	369(97.6)	使用目的（複数回答可）	n=369
			ボタン付け	351(95.1)
			スカートやズボンの裾まつり	163(44.2)
			小物作り	75(20.3)
			手芸	63(17.1)
			靴下の繕い	59(16.0)
			カギホック付け	38(10.3)
			洋服を作る	37(10.0)
			（以下、10%未満）	
ミシン	68(18.0)	310(82.0)	使用頻度	n=310
			使っているのを見たことがない	14(4.5)
			めったに使わない	178(57.4)
			年１回程度使用	41(13.2)
			月１回程度使用	35(11.3)
			週１回程度使用	5(1.6)
			頻繁に使用	7(2.3)
			わからない	27(8.7)
アイロン	7（ 1.9）	371(98.1)	使用頻度	n=371
			使っているのを見たことがない	1(0.3)
			めったに使わない	43(11.6)
			年１回程度使用	7(1.9)
			月１回程度使用	54(14.6)
			週１回程度使用	72(19.4)
			頻繁に使用	159(42.9)
			わからない	29(7.8)

しい方法の利用普及状況は不明である。

アイロンの使用頻度は「頻繁に使っている」家庭が４割程度あり、「週１回程度」と合わせると６割を越えていた。ノーアイロン素材の衣服（まったくアイロンがけを必要としないわけではない）の普及や、パイル地のハンカチの利用など、技術革新や生活の変化が、今まで大変であった洗濯後のアイロン作業を簡略化させてきた。しかし、しっかりとアイロンがけされた皺のない衣服の着用への要請はあるようである。

一方、家庭に所持されているミシンの利用状況は「めったに使わない」が６割程度あり、「年１回程度」と合わせると、７割を越えていた。ミシンを出してまで何かを作るという状況ではないようである。しかしながら、ミシンの所持率は前述したように80%と高く、「嫁入り道具」的色合いが濃そうである。また近年では、結婚時ではなく子どもの幼稚園入園時に購入する世帯がほとんどというデータもある。それでも、保育園、幼稚園、小学校入学時の準備品として、各学校で定められた規定寸法の各種袋、鞄類の作成、雑巾作りなどの活躍後は押入の奥であるという家庭が多いようである。それらについても、近年では、幼稚園、学校近隣の商店が「○○小学校の入学準備品作ります」「生地は好きなものを選べます」「好みの生地の持ち込みOK」などと広告を出し、家庭外の作業になっている現実がある。また、PTAなどが企画してミシンが使える保護者が使えない家庭の分まで分

担して縫製するという現象まで生じてきている。しかしながら、このような状況に至ってまでも、皆が同じである「学校指定品」購入制度を導入しないことも見逃せない。子どものために保護者が手作りをすることに価値をおいている状況が窺える。

さらに具体的に、本人を除く家庭におけるもの作りの状況を示した結果は、表３のとおりである。

表３　家庭における被服行動に関する環境（その２）

人（%）

n=378	無	有		
洋服を作る家族	314(83.1)	64(16.9)		
和服を作る家族	355(93.9)	23(6.1)		
手芸等をする家族	236(62.4)	142(37.6)	種類（複数回答可）	n=142
			編み物	95(66.9)
			刺繍	46(32.4)
			パッチワーク	45(31.7)
			プロミスリング	17(12.0)
			トールペイント	11(7.7)

「洋服を作る家族」がいる家庭は16.9%、「和服を作る家族」がいる家庭は6.1%と予想よりは高かったが、裁縫箱、ミシンなどの使用目的や頻度と合わせて考えると、洋服和服の作成頻度については高くないようである。一方、「手芸等をする家族」は４割近く存在し、その種類は「編み物」が７割近くを占め、次いで「刺繍」と「パッチワーク」が３割程度、「プロミスリング」、「トールペイント」（両者とも手芸の分類ではないが被調査者のわかりやすさを優先して提示）は10%前後であった。他に「染色」「織物」「組み紐」「マクラメ」等も提示したが、0%に近い状況であった。一般的に特別な用具を必要としないもの、概して広いスペースを要しないものの人気が高いようである。

洋服を作る、和服を作るといった家庭環境が失われつつある状況が確認できた。また、衣服類を補修するといった行動も減少してきている状況が読みとれたが、一方で形を変えた行動の存在が示唆された。便利になることは良いことであるが、一方で、そのような環境で育つことにより、今まで当たり前に出来ていた作業である蝶々結び、玉結びや、玉留めすら出来ない人たちを生み出し、消費する一方である生活態度を考える必要もあるであろう。それでも、手芸等をしている家庭環境はまだ40%ほど存在し、もの作りに意味を見いだしている状況も確認できた。

Ⅲ－２　被調査者自身の被服に関する環境や行動

被調査者自身の被服環境に関する行動を、自分専用の裁縫箱および携帯用裁縫セットの有無や使用目的、家庭にあるミシンやアイロンの使用状況から見た結果は、表４のとおりである。

自分の裁縫箱を持っている女性は72.0%、男性は42.9%と男女ではっきりと差が出た。小学校の家庭科の授業を受けるのに際して男女同じく準備したであろう裁縫箱が、大学生に至る過程でその所持にこれほどの差が生じた。同じく、携帯用裁縫セットについては、

表４　被調査者自身の被服に関する環境や行動（その１）

人（%）

女性n=294 男性n=84	無		有				
	女性	男性	女性	男性		女性	男性
裁縫箱	82 (27.9)	48 (57.1)	212 (72.1)	36 (42.9)	使用目的(複数回答可)	n=202	n=36
					ボタン付け	179(88.6)	31(86.1)
					手芸	38(18.8)	1(2.8)
					衣類の裾まつり	37(18.3)	3(8.3)
					小物作り	35(17.3)	4(11.1)
携帯用裁縫セット	159 (54.1)	59 (70.2)	135 (45.9)	25 (29.8)	靴下の繕い	27(13.4)	1(2.8)
					洋服を作る	17(8.4)	2(5.6)
					カギホック付け	15(7.4)	0
					鞄等の修繕	9(4.5)	3(8.3)
ミシン	51 (17.3)	17 (20.2)	243 (82.7)	67 (79.8)	使用頻度	n=242	n=65
					使ったことがない	42(17.4)	34(52.3)
					めったに使わない	161(66.5)	26(40.0)
					年１回程度使用	25(10.3)	4(6.2)
					月１回程度使用	10(4.1)	1(1.5)
					週１回程度使用	3(1.2)	0
					頻繁に使用	1(0.4)	0
					使用目的(複数回答可)	n=166	n=25
					衣類の裾上げ	65(39.2)	13(52.0)
					小物作り	54(32.5)	6(24.0)
					着るもの	39(23.5)	5(20.0)
					鞄	25(15.1)	2(8.00)
					雑巾	22(13.3)	0
アイロン	4 (1.4)	3 (3.6)	290 (98.6)	81 (96.4)	使用頻度	n=290	n=78
					使ったことがない	16(5.5)	18(23.1)
					めったに使わない	144(49.7)	34(43.6)
					年１回程度使用	18(6.2)	4(5.1)
					月１回程度使用	49(16.9)	12(15.4)
					週１回程度使用	29(10.0)	5(6.4)
					頻繁に使用	34(11.7)	5(6.4)

女性45.9%、男性29.8%の所持率で、裁縫箱もしくは携帯用裁縫セットの所持率は女性79.3%（233人）、男性50.0%（42人）であった。家庭にある物を共有する場合もあるだろうがこれほどの男女の差は説明できない。裁縫箱を使うようなことは自分にはないだろうという前提での不所持と見ることが妥当であるように思われる。また、それらを所持しているものの使用目的は、男女とも「ボタン付け」であり、それぞれ９割近くを占めていた。その他に女性は「手芸」、「衣類の裾まつり」、「小物作り」がほぼ２割程度と続いた。

ミシンの使用頻度は、まず「使ったことがない」女性が17.4%、男性が52.3%と男女差があったが、「使ったことがない」、「めったに使わない」を合わせると、女性83.9%、男性92.3%と男女共にほとんど使わないことが判明した。一方、ミシンを使用する者の使用目的は、男女とも「衣類の裾上げ」が多く、男性５割、女性４割であった。女性は続いて「小物作り」３割、「着るもの」２割程度であった。

アイロンの使用頻度もミシンと同様に「使ったことがない」女性が5.5%、男性が23.1%

と男女差があったが、「使ったことがない」、「めったに使わない」を合わせると、女性55.2%、男性66.7%と６割程度の男女がアイロンをほとんど使わないことが判明した。しかし一方で、「月１回程度使用」、「週１回程度使用」、「頻繁に使用」を合わせると男女とも３～４割程度ある。衣類の皺なし文化の名残はあるようである。

さらに具体的に、被調査者のもの作りの状況を示した結果は、表５のとおりである。

表５　被調査者自身の被服に関する環境や行動（その２）

人（%）

女性n=294 男性n=84	しない		する				
	女性	男性	女性	男性			
洋　裁	274 (93.2)	83 (98.8)	20 (6.2)	1 (1.2)			
和　裁	292 (99.3)	84 (100.0)	2 (0.7)	0		女性	男性
手芸　等	231 (78.6)	79 (94.0)	63 (21.4)	5 (6.0)	種類(複数回答可)	n=62	n=5
					編み物	38(61.3)	4(80.0)
					刺繍	17(27.4)	
					プロミスリング	15(24.2)	
					パッチワーク	4(6.5)	
					マスコット作り	3(4.8)	
					トールペイント	2(3.2)	
					組み紐	2(3.2)	
					ビーズワーク	2(3.2)	
					染色	1(1.6)	
					マクラメ	1(1.6)	

洋裁や和裁をする男女はほとんどいない。かろうじて洋裁をする女性が6%ほどいることがわかった。手芸をする女性は２割ほどであり、その種類は「編み物」が６割を占めている。次いで「刺繍」、「プロミスリング」が３～２割程度で続いている。手芸等をする男性はわずかであるが、そのほとんどが「編み物」をすることもわかった。一人の男性編み物講師がタレント化し、男性が編み物をすることに抵抗が少なくなったことも影響しているのかもしれない。ちなみに、彼は各地の男女共同参画関連行事に講師として招聘されることも多々あるようである。

洋裁、和裁、手芸、どれもできあがった製品を購入すれば一瞬にして手に入るが、作るとなれば程度の差はあれ、根気がいる作業である。また、創意工夫をし、世界で１つだけのものを作るということに価値を見いだせない者にとっては辛い作業でしかないのかもしれない。家庭においては、ものを作ること全般に渡って希薄化しているように思われる。ものを作る上で必要とされる、根気を始め、創意工夫、集中力、計画性、ものを大切にする等、様々な能力もまた希薄化していくように思われる。

Ⅲ－３　被調査者の家庭科等（学校教育）における被服関連実習の状況

学校教育における被服関連実習の状況を、小学校、中学校、高等学校において、縫い物、および、手芸等をしたか否かから見た結果は、表６のとおりである。

表６　学校教育における被服関連実習の状況

人（%）

女性　n=294 男性　n= 84		小学校		中学校		高等学校	
		女性	男性	女性	男性	女性	男性
縫い物	した	298(98.3)	81(96.4)	251(85.4)	68(81.0)	194(66.0)	38(45.2)
	しない	5(1.7)	3(3.6)	43(14.6)	16(19.0)	100(34.0)	46(54.8)
手芸等	した	213(72.4)	39(46.4)	159(54.1)	30(35.7)	90(30.6)	15(17.9)
	しない	81(27.6)	45(53.6)	135(45.9)	54(64.3)	204(69.4)	69(82.1)

縫い物をした者は、小学校で男女とも100％近く、中学校でおよそ80％程度、高等学校では女性が66.0％、男性が45.2％と差が出、男女平均は61.4％であった。学校が上がるごとに縫い物をした者は減少した。また、高等学校での男女差は科目選択の結果かもしれない。一方、手芸的なものをした者は、小学校で女性ほぼ７割、男性５割弱、男女平均は66.7％、中学校で女性５割強、男性４割弱、男女平均50.0％、高等学校で女性３割、男性２割弱、男女平均27.8％であった。手芸的なものをした者も学校が上がるごとに減少している。手芸等をした者の男女差は、家庭科クラブや手芸クラブなど、学科科目外で指導されたものの影響と思われる。中学校、高等学校とも男女共修制度を経てきた被調査者の年代ではあるが、性別役割分業観が垣間見られる。高等学校に関しては、女子高校に通う者も67人含まれていたので、女子校の影響を調べてみた。縫い物をした者56.7％、手芸等をした者29.9％と、縫い物に対しては女子校の方が全体より10％低い結果となり、手芸等は変わらなかった。

具体的に、学校教育で縫い物をした者が制作した作品名を示した結果は、表７のとおりである。

小学校で制作された縫い物作品は19種類、平均採択率190.9％、中学校では37種類167.0％、高等学校では37種類、149.8％であった。小学校では平均２作品を制作し、中学校、高等学校では１または２作品であったことがわかる。内容的には、小学校は「エプロン」が９割、「鞄」が５割、「弁当包み」が３割弱である。「鞄」に「巾着袋」や「ナップサック」を加え、鞄類とすると、それらの合計採択率は６割近くであった。ほとんどがこの３種類に集約される。中学校は「エプロン」が５割、「雑巾」が３割、「鞄」が２割、「ハーフパンツ」、「弁当包み」がそれぞれ1.5割程度であった。高等学校では「エプロン」が５割であったが、「雑巾」、「鞄」がそれぞれ１割、１割を切るが「ベスト」「ハーフパンツ」「ぬいぐるみ」と続き、多様なものが採用されている様子が窺える。ここでの「縫い物」と後述する「手芸等」との区別は被調査者自身の判断であったので厳密に区別はされていない。

表７　学校教育で行われた縫い物の作品名

（複数回答可）人（%）

五十音順	小学校 n=361	中学校 n=276	高等学校 n=209
アームカバー	1 (0.3)		
ウォールポケット	3 (0.8)	1 (0.4)	
上着		1 (0.4)	
エプロン	**316 (87.5)**	**140 (50.7)**	**106 (50.7)**
割烹着		1 (0.4)	1 (0.5)
鞄	**178 (49.3)**	**61 (22.1)**	**25 (12.0)**
巾着袋	3 (0.8)	1 (0.4)	
キャミソール	7 (1.9)	1 (0.4)	
クッション/座布団（カバー）		7 (2.5)	**12 (5.7)**
靴袋			1 (0.5)
コースター	1 (0.3)		
小物入れ	1 (0.3)		1 (0.5)
三角巾			2 (1.0)
ジャケット		1 (0.4)	2 (1.0)
甚平			4 (1.9)
スカート		14 (5.1)	7 (3.3)
雑巾	**25 (6.9)**	**76 (27.5)**	**26 (12.4)**
体育祭/文化祭の衣装			2 (1.0)
ダーツの的	1 (0.3)		
Tシャツ		12 (4.3)	5 (2.4)
ティッシュカバー	8 (2.2)	4 (1.4)	6 (2.9)
トイレットペーパーカバー		1 (0.4)	
ドレス			1 (0.5)
ナップサック	**27 (7.5)**	2 (0.7)	
鍋敷き	1 (0.3)		
鍋つかみ	3 (0.8)	4 (1.4)	
ぬいぐるみ	2 (0.6)	1 (0.4)	**13 (6.2)**
布絵本			1 (0.5)
ネックウォーマー			1 (0.5)
のれん		1 (0.4)	
パーカー		3 (1.1)	3 (1.4)
ハーフパンツ	1 (0.3)	**43 (15.6)**	**15 (7.2)**
はちまき			1 (0.5)
はっぴ		1 (0.4)	**11 (5.3)**
パジャマ		5 (1.8)	6 (2.9)
ハンガーカバー		1 (0.4)	
バンダナ			1 (0.5)
半天	1 (0.3)	1 (0.4)	1 (0.5)
服		1 (0.4)	2 (1.0)
筆箱		1 (0.4)	
ブラウス		1 (0.4)	3 (1.4)
ベスト（フリース含む）		9 (3.3)	**16 (7.7)**
弁当包み	**96 (26.6)**	**40 (14.5)**	**12 (5.7)**
帽子		1 (0.4)	1 (0.5)
枕カバー	14 (3.9)	9 (3.3)	7 (3.3)
マフラー		1 (0.4)	1 (0.5)
もんぺ			1 (0.5)
幼児の玩具(サイコロ・ボール)		4 (1.4)	3 (1.4)
よだれかけ		1 (0.4)	
浴衣		7 (2.5)	8 (3.8)
ランチョンマット		2 (0.7)	
リース			4 (1.9)
ワンピース		1 (0.4)	1 (0.5)
計	19種類 689件 (190.9)	37種類 461件 (167.0)	37種類 313件 (149.8)

学校教育で手芸等をした者が制作した手芸等の種類別の結果は、表８のとおりである。

表８　学校教育で行われた手芸等の種類

（複数回答可）人（%）

	小学校 n=237	中学校 n=164	高等学校 n=84
刺繍	105(44.3)	61(37.2)	24(28.6)
編み物	81(34.2)	74(45.1)	38(45.2)
手縫い	151(63.7)	63(38.4)	29(34.5)
染色	58(24.5)	30(18.3)	19(22.6)
織物	8(3.4)	4(2.4)	2(2.4)
計	403(170.0)	232(141.5)	112(133.3)

小学校では「手縫い」が６割強、「刺繍」が４割強、中学校では「編み物」が５割弱、「手縫い」、「刺繍」がそれぞれ４割弱、高等学校では「編み物」が５割弱であった。小学校の方ほど複数の種類を採用しているが、平均して２種類には及ばなかった。

具体的に、学校教育で手芸等をした者が制作した作品名を示した結果は、表９のとおりである。

小学校、中学校、高等学校、すべてにおいて「マフラー」が４割前後で特段高かった。その手芸の種類はほとんどが編み物であったが、小学校で１件のみ織物であった。続いて、小学校では「ぬいぐるみ」と「マスコット」を合わせて２割程度であった。中学校では「毛糸編みたわし」が１割、「ぬいぐるみ」と「マスコット」を合わせて１割であった。編み物の「セーター」と「ベスト」が１件ずつあったが、難易度から考えてクラブでの指導と考えられる。高等学校では「ぬいぐるみ」が２割、「クッション・座布団」が１割、「幼児の玩具」が１割であった。幼児の玩具の内訳は、「ボール」や「サイコロ」であった。保育内容と関連づけた教材と考えられる。中学校と高等学校で「クッション・座布団」は刺繍が多く、「Tシャツ」はいずれも染色であった。

「縫い物」と「手芸等」で共通して言えることは、小学校、中学校、高等学校と学校が上がっても、「縫い物」では「エプロン」、「手芸等」では「マフラー」と制作品に重複が見られることである。

「エプロン」は制作して、それを着用して調理実習をするというパターンになっているようであり、採用率が高いと思われる。同じ作品でも小中高と上級学校になるほど縫製技術を要するデザインに変化したり、材料を工夫したりなど何かしらのステップアップがあるだろうと推測するのは当然であろう。しかしながら、現状は様々なようである。数件の聞き取り事例を紹介する。

Ａ小学校で制作のエプロン：学校一括購入の実習用キットで、児童が魚屋さんの前掛けと呼ぶ直線のみで構成される台形型のエプロンである。四方を三つ折りにしてミシンでたたき付けて始末する。紐は市販のロープが封入されている。それを首の三つ折り部分に通して結ぶ。ウエスト紐は、ウエスト部分にミシンでたたき付けて出来上がりである。

Ｂ中学校で制作のエプロン：学校一括購入の実習用キットで、袖ぐり部分がカーブ状に

表９　学校教育で行われた手芸等の作品名

（複数回答可）人（%）

五十音順	小学校 n=84	中学校 n=66	高等学校 n=44
編みぐるみ		1 (1.5)	
ウォールポケット	1 (1.2)	1 (1.5)	
エプロン	1 (1.2)		2 (4.5)
絵本		1 (1.5)	2 (4.5)
額	1 (1.2)		
鞄	4 (4.8)	2 (3.0)	1 (2.3)
壁飾り	2 (2.4)		
キーホルダー	2 (2.4)		
巾着袋	3 (3.6)		1 (2.3)
クッション・座布団	3 (3.6)	4 (6.1)	**4 (9.1)**
毛糸編みたわし	1 (1.2)	**7 (10.6)**	2 (4.5)
毛糸編みポシェット	1 (1.2)		
コースター	2 (2.4)	1 (1.5)	2 (4.5)
小物	3 (3.6)	2 (3.0)	
刺し子ふきん		1 (1.5)	1 (2.3)
刺繍入エプロン	1 (1.2)		1 (2.3)
刺繍入ティッシュカバー	1 (1.2)		
刺繍入時計		2 (3.0)	
刺繍ハンカチ	2 (2.4)		
絞り染めハンカチ	2 (2.4)		
セーター		1 (1.5)	
段通マット		1 (1.5)	
手ぬぐい	2 (2.4)		
手袋	2 (2.4)	1 (1.5)	
テーブルクロス	2 (2.4)		
Tシャツ		2 (3.0)	1 (2.3)
ティッシュカバー	4 (4.8)	1 (1.5)	
ナップサック	4 (4.8)		
鍋敷き	1 (1.2)	1 (1.5)	1 (2.3)
鍋つかみ	2 (2.4)	2 (3.0)	
ぬいぐるみ	**5 (6.0)**	**5 (7.6)**	**9 (20.5)**
針山	1 (1.2)		
ハンカチ	4 (4.8)	4 (6.1)	3 (6.8)
筆箱		1 (1.5)	
プロミスリング	1 (1.2)		
ブックカバー		1 (1.5)	
ベスト	1 (1.2)	1 (1.5)	
ポシェット	1 (1.2)		
マスコット	**10 (11.9)**	3 (4.5)	
マフラー	**36 (42.9)**	**29 (43.9)**	**16 (36.4)**
めがねケース	1 (1.2)		
幼児の玩具		1 (1.5)	**4 (9.1)**
ランチョンマット		1 (1.5)	
計	32種類 107件 (127.4)	26種類 77件 (116.7)	15種類 50件 (113.6)

なった一般的なサロンエプロン型である。始末が必要な周囲はすべてミシンで始末済みであり、曲線部分もバイヤス始末ではなく、三つ折り始末である。ボタンホールもできあがっている。おまけに紐も四方すべてがミシン始末済みである。生徒の実習内容は、封入されている同じ生地でポケットの形を決め、ポケット口をまつり、身頃に本返しで縫いつけることと、紐をウエスト部分に縫いつけること、紐先のボタン付け２カ所である。

Ｃ女子中学校で制作のエプロン：エプロンの型紙を製図する。必要な生地を材質、色を検討し、糸などの付属品も含め各自が準備する。裁断し、ミシン縫製。曲線部分は同じ生地でバイヤステープを作りバイヤス始末する。ポケットの形を決め、ポケット口を三つ折りでミシン始末し、周囲をミシンでたたき付ける。同じ生地で三角巾を作る。ロックミシン始末後、端ミシン始末する。同じ生地でアームカバーも作る。

Ａ小学校ではミシンを使用しほぼ一から仕上げた。Ｂ中学校では最終仕上げの手縫いのみであった。必ずしもミシンの使用が上級というわけではないが、ミシンの使用は保守点検の問題も生じてきて教員には負担になるのは間違いない。また、仕上げだけを経験させるいわゆる「いいとこ取り」の実習内容も考えたいものであるが、授業時間数の問題等、一概に教師の問題のみに集約させてはならない面もあろう。また、創造性の教育を考えれば、キット購入で画一化されているのも問題であろうが、材料を準備しない者や出来ない者、材料格差が生じないための策であるようである。最近では、実習用キットの生地の色柄の選択数を増やすなどの工夫もされている。

同じ中学校でも、Ｂ中学校とＣ女子中学校の格差は大きい。Ｃ女子中学校は女子中であるからと考えられるかもしれないが、前述したように高校ではあるが女子校の縫い物の実習実施率は全体より低かった。本事例では、家庭科教員の被服実習能力の低下を避けたいという思いがあるとわかった。

教員に関する事例を紹介する。

Ａ小学校の家庭科教員：前年度に学級崩壊になったので、担任業務のない家庭科担当になった。エプロンを縫う際に、ミシン目の大きさを調整せず児童から苦情が出た。

Ｂ中学校の家庭科教員：エプロンの制作見本のまつり縫いが正しく出来ていなかった。ポケット生地の地の目が無視されていた。

Ｃ中学校の教員：家庭科が男女共修になってから、実習課題の選択や実施に困難が生じてきた。

Ｄ高等学校の教員：生徒数減少で家庭科教員が一人しか配置されない中で、学校運営業務は科目別に割り振られ、一人では身が持たない。実習授業は準備、後片づけにかなりの時間を要し、特に被服関連は作品の仕上がらない生徒のホローの時間がとれない。

家庭科という科目の位置づけや、教員の被服実習能力、学校運営に至るまで様々な問題が重なり合っている様子が窺える。

そこで、これらの問題はある程度クリアーされているであろうと思われる高等学校の家政科について、その出身者の被服関連実習の状況を抜き出して見た。わずか８人であったが結果は、表10のとおりである。

家政科であっても被服関連実習をしなかった者が８人中３人もいる。一方で、「縫い物」

表10　家政科専攻（高校）であった者の被服関連実習の状況

被調査者	縫い物											手芸的なもの				
	雑巾	枕カバー	エプロン	Tシャツ	スカート	パンツ	ブラウス	ベスト	ジャケット	ドレス	甚平	浴衣	刺繍	編み物	手縫い	染色	織物
A		○											○				
B			○	○	○		○		○		○				○	○	○
C			○			○	○		○	○							
D																	
E				○		○						○	○	○			
F																	
G	○		○					○					○	○	○		
H																	

を６作品、「手芸的なもの」を３種類制作した者、（ウエディング）ドレスまで制作しているが、「手芸的なもの」は制作しなかった者など、家政科においても多様な状況であることがわかった。

また、高校を卒業して進学する生徒がほとんどのファッション専門学校の教員の話から、年々、実習の標本見本が詳細に渡って必要になってきている状況等も明らかになった。このことは著者らも感じているところであるが、好んで専門学校に在籍している学生の質の低下も現れてきているようである。それまでの教育の質の低下の影響は当然あると思われる。

専門学校の状況も含めこのような実習状況であるから、20～30年前の家庭科の実習状態に戻ることが良いと一概に言っているわけではない。しかしながら、当時は少なくとも、小学校で身の回りのものを作る（雑巾、ウォールポケット、エプロン等）、中学校で日常着、休養着、外出着を作る（スカート、パジャマ、ワンピース等）、高等学校で裏付きの衣服または和服を作る（ウール地のジャンバースカート、はっぴ等）といったように発達段階や、難易度に応じた実習制作品の展開をしていたように思われる。９年、もしくは12年間の学校教育の中でもう少し体系づけた実習内容を構築すべきであると思われる。

一方、手芸に関する実習は、当時、刺繍（枕カバーやテーブルセンター等）程度であったように思う。近年、家庭での衣服制作の衰退に反して生活の豊かさを求める手芸に、多少、実習内容をスライドさせてきているようにも思われる。今や趣味としての手芸は手芸材料専門店の多店舗化からもわかるようにブームとなっているほどである。このような状況も知った上で、学校教育における家庭科教育、特に被服関連内容をどう考えていくのか、実習をどう取り扱って行くのか、考察が必要であろう。

Ⅲ－４　被調査者のもの作りに関する意識

被服関連実習を考える上で、大きな比重を占めることは、ものを作ることの好き嫌いで

あると思われる。そこで、ものを作ることの好き嫌いと、それと関連するであろう意識との関係を見た結果は、表11のとおりである。

表11　もの作りの好き嫌いと関連要素との相関関係

n=378	ものの構造に興味あり	もの作りはストレス解消になる	創造力あり	手先が器用	ものを作り上げることに達成感あり
ものを作ることがすき	.476**	.443**	.415**	.414**	.406**

** p<.01

「ものを作るのが好き」との間で0.400以上の有意な相関関係が認められた項目は「創造力がある」、「ものの構造に興味がある」、「手先が器用」、「もの作りはストレスを解消する」、「ものを作り上げることに達成感がある」であった。他に、全体では低い相関しか認められなかったが、男女で大きな差が認められた項目に「根気強い」（男性r=.456**、女性r=.196**）、「緻密な性格」（男性r=.413**、女性r=.217**）、「手作りのものは価値が高い」（男性r=.416**、女性r=.154**）があり、いずれも男性の方が高かった。この男女差はどこからくるものなのか不明だが、女性にとっては、家庭科でのもの作りは根気や緻密さをそれほど感じさせないものなのかも知れない。家庭科の男女共修において考慮すべき点なのかも知れない。

また、創造性をかき立てるような課題を考え、そのものの構造について示唆しつつ、作り上げることに達成感を持たせるようにすることで、もの作りを好きにさせることが可能であると考えられる。また、ものを作り上げる過程で手先の器用さや、根気強さ、などを身につけることも可能になると思われる。

これらからは因果関係は明らかにはできないが、家庭科におけるもの作りに関する意識の状況が一定限明らかになった。

Ⅳ．結言

今回は、家庭科教育における被服教育のあり方を検討すべく、家庭における被服関連行動、および、学校教育における被服関連実習の内容等の調査をし、その状況を明らかにすることを目的とした。

その結果、家庭における裁縫箱、ミシンやアイロンの所持率、それらの使用目的や使用頻度などが明らかになり、家庭における被服に関連する状況や行動の衰退の状況が把握できた。また、学校教育における被服関連実習として、縫い物や手芸などの実習実施状況や制作品の内容が明らかになり、実習機会の減少と内容のばらつき等の状況も明らかにすることができた。さらに、もの作りとそれに関連するであろう意識との関係性も一定限明らかになった。

今後は、学習指導要領との関連性、社会の動向、学校の現状、教員、家庭との関連、男

女共修の影響、児童や生徒の発達段階など様々な切り口から、家庭科教育における被服教育のあり方を考えていきたいと思う。

特に、教育効果という面から実習授業にこだわっていきたい。実習では、講義で発覚しないことが露わになるようである。定規を正しく読む、はさみを使ってまっすぐに切る等の基本的なことも出来ないことが判明する。机上で理解しているつもりでも、実習ではその未修得さを隠しきれない。家庭科が他の科目と違うところは、体験的、実践的科目という点である。実践できなければ意味がないと思われる。

謝辞

本調査の実施に際し、ご協力くださった皆さんに深く感謝する。

参考文献

1）石井照子編『生活造形－結ぶ・編む・組む・織る・繍う－』建帛社、2005年。
2）大竹美登利「家庭科教育と家政学」、『日本家政学会誌』第57巻、第8号、p.577-580、2006年。
3）佐藤文子・川上雅子『家庭科教育法』高陵社書店、2001年。
4）日本家政学会編『家政学将来構想 1984 家政学将来構想特別委員会報告書』光生館、1984年。
5）福田公子・山下智恵子・林未和子編『生活実践と結ぶ家庭科教育の発展』大学教育出版、2004年。
6）柳沢澄子・祖父江登子他編『子どもの心身の発達を促す手仕事のすすめ』家政教育社、1997年。
7）（村島有紀）「家庭用ミシン　実用→趣味　賢く優しく　中高年向きの機能充実」産経新聞、2006年9月15日。